

留学・研究計画書

氏名 東 智美	留学機関名 ラオス国立大学林学部
留学先国名 ラオス人民民主共和国	留学期間 西暦 2006 年 11 月 ~ 2008 年 10 月
研究テーマ 森林の保全と利用をめぐる制度・アクター～ラオス北部ウドムサイ県の土地・森林委譲事業を事例に～	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究は、ラオス北部ウドムサイ県・パクベン郡の土地・森林委譲事業(LFA)を事例に、ラオスの土地・森林制度とそれを取り巻くアクターに注目して、森林資源の利用と保全をめぐる「問題」の政治性を解明し、土地・森林政策が本来の意図していないネガティブな結果を引き起こしてしまう要因を明らかにすることを目的とする。さらに、アクター間の力関係の不均衡を調整し得る NGO や研究者などの「外部アクター」の役割について提言を行う。</p> <p>ラオスでは、1996 年以降、村落領域を画定し、農地や村落管理林、保全林などをゾーニングする LFA が実施されている。本来は、焼畑の安定化や農業生産性の向上とともに、地域コミュニティによる森林資源管理を支援することを目的とした政策である。しかし、これまで申請者が短期のフィールド調査を実施したパクベン郡では、LFA が地域住民の土地・森林利用の形態に即さない形で行われ、地域住民の農地不足やそれに伴う焼畑のサイクルの短縮化、破壊的な森林利用、さらには焼畑を主な生計手段とする地域住民の貧困化を引き起こしている。</p> <p>パクベン郡で起こっている森林資源管理に関わる問題を、単に、村人が上からの政策に反対の声を挙げにくい共産党一党独裁の政治体制のラオスにおける政策の失敗と見做してしまうと、パクベン郡の LFA が農業生産の向上や森林資源管理という面で政府にとっても好ましくない結果を引き起こしている背景を説明できない。ここで、合理的選択論を唱えるフィーニー [Feeny, 1992] は、土地所有制度の変化について、変化を求める「需要」と制度変革のための意思や能力といった「供給」の側面から分析した。「需要」と「供給」から制度変化を捉える視点は、パクベン郡の土地・森林制度を考察する際にも有効ではあるが、それだけでは森林資源をめぐるラオスの複雑な政治・経済状況を解明できない。パクベン郡の事例では、「問題」の認識には各アクター間での差異があり、また「問題」が作り出される過程には、アクター間の情報や力関係の不均衡が複雑に絡み合っていることがあるのではないかと考えられる。つまり、政治・経済力が異なる様々なアクターが互いの行動や意図に影響を与え合うことで、制度変革の「需要」と「供給」のアンバランスが生まれ、それが非持続的な土地・森林利用につながっていると見ることはできるのではないだろうか。</p> <p>そこで、本研究では、森林資源の管理をめぐる政治・経済状況や政府・援助機関・伐採／植林企業の動向など、ラオスの森林セクターとそれを取り巻くアクターを分析した上で、あるアクターの行動や選択が他のアクターの行動や選択に影響をどう与えるかを分析する。</p> <p>その上で、アクター間の力関係や情報のアンバランスを調整し、問題解決につなげるために、NGO や研究者などの「外部アクター」が果たせる役割とそれを可能とする要件について提言を行いたい。</p>	